

演出家の演出を支える身体性を、俳優は獲得しなければならない。でもそれは演出家の問題として。まあ現代演劇において、ましてや東京の劇場空間での上演や作品作りにおいて、「演出を支える身体性」などと言っても／それは、それほど特徴的な他の演出との差を生み出すものではないかも知れない（能や歌舞伎との比較を考えれば分かりやすい）が、しかし、演出家が何を俳優に望むのか、演出家自身がそれを自覚し、それを上手に伝える術を持たなければ、舞台作品の芸術作品としての完成には程遠い。芸術作品としての、などと、私はそんなものを望むのか？という問いは一旦横に置いて話を続けるが、一つの舞台が、一つの作品が到達できることをより高みに置く時には、何より演出家の技術（才能とは言わない、後天的に身に付けることが出来る技術だ）を切磋琢磨し、磨かなくては、と意識してしておく。これは自分の問題として、自戒の為に書いておく。改めて、日本の演劇の聖地である利賀で出会った演劇の世界の先駆者達、鈴木忠志、平田オリザ、宮城聡、安田雅弘...、彼らの成功の陰にあるのは、圧倒的な演出的な特徴や個性の確立と不可分であることは忘れてはならない。実は決して脚本ではないと思うのです。この国で普通に評価の上段に上るようになるモノは、実は脚本ではなく、演出的な特徴に支えられてのことであるという風に見えるのです。もちろん、能や狂言や歌舞伎など今の時代まで生き残っている伝統芸能も同様の理由からであると思える。同時に、今、例に上げた多くが、日本だけではなく国際的な評価も得ている点も付記しておく。成功、などという価値観の話としてアレするのも何だが、今の時代、自分の都合を計算式に入れて、計算の先に出てきた答えを見るに、もう背に腹は代えられない話として、ここに書いたことを心に留めて置きたい。では忘れないように、この文章の一行目をもう一回書いてこの話を終わりにする。きっと俳優がこの文章を読むことが多いだろうし、この一行だけが具体的には大事なので。演出家の演出を支える身体性を、俳優は獲得しなければならない。

ちょっと思うのは、あんたは色々話すけど、これこそを言ってほしかった、って人がいる気がする。

楽園王 長堀博士